



T O P I C S

10月17～19日、国立国会図書館国際子ども図書館主催の児童文学連続講座が開催されました。本年度は、日本の児童文学を6つのテーマに分け、6人の講師を招いての講座でした。

子どもの本の出版界では、翻訳の長編ファンタジーのブームが続いています。子どもの本にはいろいろなタイプの文学があり、児童文学の誕生には、さまざまな経緯がありました。1960年前後に童話という形式をめぐって新しい児童文学の在り方が模索されたのでした。日本の児童文学の歩みを知っておくことは、今日の読書の問題を考える上でも意味があるのではないのでしょうか。

(各講座の内容については裏面でご紹介します。)

子ども図書研究室のテーマ展示

「クリスマス・お正月の本」(11月末まで)

「赤木かん子氏紹介資料」(12月末まで)

「代田知子氏紹介資料」(12月末まで)

「第17回読書感想画中央コンクール指定図書」

「静岡県教育研究会学校図書館研究部推せん図書」

イベント情報

子ども読書推進講演会「子ども・メディア・物語」

講師：斎藤敦夫氏(児童文学作家・編集者)

日時：12月10日(土)午後2時～4時

会場：なゆた・浜北 3階 大会議室

(遠州鉄道「浜北」駅下車すぐ)

定員：200名(申込み先着順)

申込み：11月15日(火)より電話、または直接
浜松市立浜北図書館へ。

託児：申込みの際に受付。(定員10名)

申込み・問合せ先：浜松市立浜北図書館

TEL 053-586-8200

新着図書から

『とんとんとんでサンフランシスコ』



ドン・フリーマン / さく
やました はるお / やく
BL出版
2005年8月

ハトの夫婦、シッドとミッジは、ビルのネオンサインの「B」の文字に住んでいた。ある朝、巣に戻ったシッドは、ネオンサインがなくなっていることに呆然とする。ミッジを探し回り、力尽きかけたシッドを助けたのは、いつも公園でパンくずをくれるハイ・リーさんだった。

主人公である2羽のハトの勇気と愛情、周囲の人間たちの善意が、ユーモアも交えて温かく描かれている。柔らかな色調の絵は、ストーリーによく調和している。1958年コールデコット賞オナーブック。【4、5歳から】 (鈴木)

『私の大好きな国アフガニスタン』



安井 浩美 / 著・写真
あかね書房
2005年7月

著者は、共同通信社のカブール支局の通信員として働くアフガニスタン在住の日本人女性。1994年生まれの少女サブジナの生活を通して、一家が戦争で故郷を追われ、各地を転々としたことと、今の学校や街の様子などの一般の人々の暮らしが、著者の低い目線で書かれている。戦争の爪跡が多く残り、日本では考えられないような不便な生活だが、この本からは、前向きの明るさが伝わってくる。イスラムの生活・習慣・宗教などを知るための入門書としても読むことができる。 (殿岡)

童話伝統批判前後 子どもの文学の新周期 1945 - 1975

(青山学院大学名誉教授 神宮輝夫)

戦後の童話出版界では、「少年文学の旗手のもとに！」というマニフェストを発して、新しい子どものために何を与えるべきかについての大きな議論があった。神宮氏は、その中心的存在であった。

日本の絵本 十五年戦争期の絵本 (立教大学名誉教授 吉田新一)

絵本のレベルアップ(赤本絵本からの脱却)のため、「児童読物改善に関する指示要項」が昭和 13 年 10 月 25 日施行された。編集上の注意事項として、幼年雑誌及び絵本に、「読ませ方」「読んだ後の指導法」等を解説した「母の項」を設けることとなった。

童話の系譜 (明星大学教授 宮川健郎)

1950~60 年代に、童話とはリアリズムでなければならないとの議論がなされ、1959 年が大きな区切りとなった。未明、ひろすけ、南吉らと違う新しい作家が登場し、児童文学は、心の中の景色を描く近代児童文学から、子どもの周囲の状況を描く現代児童文学へと移行した。

タブーの崩壊とヤングアダルト文学 (白百合女子大学教授 石井直人)

1970 年代には、児童文学について、子どもがもつインタレスト(関心)と共鳴してそこに交流を生むことができる物語とは何かが問われ、性、家出、自殺、離婚が児童文学に書かれた。

リアリズムにおけるありのままの自己像の探求、ファンタジーにおける魂の救済、ナンセンスにおけるルールからの解放など、「人間とは何か」、「人間でなくなるとは何か」という問いに答え得る物語が求められている。

日本のファンタジー (白百合女子大学教授 井辻朱美)

現代日本の新しいファンタジーは、荻原規子、上橋菜穂子、小野不由美、梨木香歩らに代表される。これら 4 人の作家に共通するのは、読者を別の世界へ連れて行き、2つの世界を見せることで、他の世界と交じり合っていることを知らせている点である。

エンターテインメントの変遷 (千葉大学教授 佐藤宗子)

児童文学は、大衆文学・通俗・娯楽としてくられ、軽視されがちであった。現在、『ズッコケ』シリーズは 8 万部刷。また、『バッテリー』『DIVE!!』『西の善き魔女』などの読者も多い。新たな読書推進の動きがある。

おやつ本と言われた『ズッコケ』シリーズ、『はれときどきぶた』シリーズなどのように、時間がたつと主食になる本もある。

子どもがおもしろがっている本が真の児童文学ではないだろうか。(栗山)

所蔵資料から

『DIVE(ダイブ)!!』(全4巻)

森 絵都 / 著

講談社

2000 年 4 月

高さ 10 メートルの飛び込み台から入水まで、わずか 1.4 秒間の、空中での演技を競う高飛び込みという競技に青春をかける少年たちの物語。

平凡な選手と自ら思い、迷いつつも飛び込みを続けている坂井知季。亡き天才ダイバーの孫であるが、海でしか飛んだことのなかった沖津飛沫。飛び込み選手を両親に持ち、将来を期待されている富士谷要一。仲間の少年たちやコーチたちの葛藤も描かれ、誰がオリンピックへ行くことになるのかと物語に引き込まれる。少年たちが飛び込みに一途に打ち込む様子がさわやかで、読後感もよい。【中学生から】(鈴木)